

文部科学省委託事業
「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」

多文化共生の学校づくり

～青島日本人学校の実践～



2021年2月

公益財団法人 海外子女教育振興財団

目次

本書刊行にあたって	1
バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成のための日本語指導プログラム開発 ～多文化共生の学校づくりを通して～	2
多文化共生の学校づくり ～青島日本人学校の実践～	3
多文化共生の学校づくりの事例	
多様な学び合いを支える日本語指導	7
中国で昔から親しまれている遊びを紹介しよう むかしから つたわる あそびを たのしもう	11
在籍学級と日本語教室との連携を生かした国語科の実践 馬のおもちゃの作り方 / おもちゃの作り方をせつめいしよう	15
さまざまなルーツをもつ児童の強みを生かして 三年とうげ	19
日本の音階と世界の音階の共通点と差異点を見つけよう 日本の子もり歌と諸外国の民謡の比較	23
さまざまな文化をもつ人たちが共に平和に暮らす社会をめざして わたしたちの平和島	27
食文化や日常の習慣の比較 「常識の違い」について考えよう	31
「やさしい日本語」について考えよう 言語の平等を考える「わかりやすく伝えよう！」	35
複言語主義について考えよう 言語の平等を考える「いくつもの言語とともに」	37
多文化共生のまちづくりが進んでいる地域に学ぼう 私たちの生活と文化	41
多文化共生における課題を Society5.0 の技術で解決しよう！ 国際理解	45
今後に向けて	49

本書刊行にあたって

弊財団は、1971年に外務省および文部省（現 文部科学省）の許可を受け、海外で経済活動を展開している企業・団体によって設立されて以来、海外赴任者・帰任者のための教育相談・情報提供や、日本人学校・補習授業校への財政上・教育上の援助等をはじめ、政府の行う諸施策および維持会員の要望に相呼応して幅広い事業を展開・実施してまいりました。

一方、日本政府においても、近年急速に発展してきた経済社会のグローバル化に対応しうる人材育成を喫緊の課題と捉えており、文部科学省では在外教育施設をグローバル人材育成拠点と位置づけて、大学・民間研究団体等の研修者と連携して評価・検証を行い、より高度なグローバル人材の育成を見据えた先進的なプログラムの開発・推進を図ることを打ち出しました。

そして、弊財団は2017年に文部科学省より委託を受け、それらの指導体制、指導・評価方法、ICT教材の活用等の実証研究を担う「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（略称：AG5）（委員長：佐藤郡衛・明治大学特任教授／前 目白大学学長／元 東京学芸大学副学長）を実施いたしております。

その中のプロジェクトの1つ「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」では、昨今、日本国内と同様に日本人学校でも増加している国際結婚等の家庭の子どもなど日本語指導が必要な子どもに対し、適切な支援を行うことで、日本人学校での学習に十分に参加できるようになり、多文化の共生する学校で共に学び合うなかで力を伸ばしていくことを目指しております。

この取組は、2017年に台北日本人学校および台中日本人学校を研究提携校として開始し、その成果を活用し2019年より青島日本人学校、大連日本人学校およびマニラ日本人学校にて、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのより汎用性の高いプログラムの開発を進めているところです。その実践につきましては、AG5の成果発信サイト（<https://www.ag-5.jp/>）におきましてもお伝えしているところでありますが、この成果を海外子女・帰国子女教育に関わる多くの方々に広くご活用いただくため、今般、青島日本人学校にて開発した学習活動案をまとめた本書を刊行するはこびとなりました。

ここに、本研究開発にご尽力いただきました佐藤委員長をはじめとするAG5運営指導委員・研究員の皆様ならびにご協力いただきました学校関係者、児童生徒およびその保護者の皆様等すべての方々に対し、あらためまして厚く御礼申し上げる次第でございます。

本書が日本語指導に携わる皆様にとりまして、学習言語としての日本語を子ども達が効果的に学ぶための手立てを考える一冊となり、今後の海外子女・帰国子女教育およびグローバル教育に加え、日本国内の外国人児童等の教育の発展にお役立ていただけたら、本事業の実施者として、これに勝る喜びはありません。

弊財団では引き続き本事業を推進し、これを通じて新たに開発したプログラムや提言を国内外の教育施設へ周知・普及することにより、高度グローバル人材育成に貢献することを目指してまいり所存でございます。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2021年2月

公益財団法人 海外子女教育振興財団
理事長 綿引宏行

バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成のための日本語指導プログラム開発 ～多文化共生の学校づくりを通して～

「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」では、8つの研究テーマがあります。本冊子で紹介する内容は、テーマ2「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」における青島日本人学校の研究実践です。

テーマ2は、2017～2018年度台北日本人学校・台中日本人学校・高雄日本人学校において、主としてバイリンガル・バイカルチュラルな観点を取り入れた日本語指導のプログラム開発、教員研修のプログラム開発に取り組みました。この成果を引き継ぎ、2019年度からマニラ日本人学校・大連日本人学校・青島日本人学校が、それぞれの学校の特色を生かしながら、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語指導プログラム開発、教員研修プログラム開発を進めています。

青島日本人学校では、台北日本人学校での日本語指導の取り組みの成果を生かして、日本語指導が必要な子どもたちが在籍学級の教科学習に参加できるよう、日本語の課外・取り出し指導及び在籍学級と連携した研究実践を進めました。さらに、バイリンガル・バイカルチュラルの観点から、国際結婚や長期滞在の家庭の子どもたちの多様性をメリットとして生かせるよう、多様な学び合いを支える日本語指導を行うため多文化共生の学校づくりに全校を挙げて取り組むことにしました。そこで、多文化共生の学校づくりに向けて学校体制を整え、授業づくりの視点を明らかにしました。これまでと同じ教材や単元でも、視点を定めることで授業構想が大きく変わります。

本冊子で紹介する青島日本人学校の実践事例は、国際結婚や長期滞在の家庭の子どもたち自身の活躍や成長はもちろんですが、共に学ぶ子どもたちもより一層学びを深めたり広げたりしていることがわかります。バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語指導プログラムは、すべての子どもにとってプラスとなるといえるでしょう。多様化が進む各地の日本人学校でも、青島日本人学校の実践を手がかりにして、それぞれの特色を生かしながら取り組んでいただければ幸いです。

今後は、日本人学校卒業後の子どもたちのさまざまな進路を視野に、現地校や地域社会との交流活動の場を生かすことなども含め、バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラムの開発を進めるとともに、より汎用性の高いプログラムへと発展させたいと願っています。

2021年2月

AG5 運営指導委員・目白大学専任講師
近田由紀子

多文化共生の学校づくり

～青島日本人学校の実践～

本校は保護者のどちらか一方、あるいはどちらも外国出身の方である国際結婚等の家庭が約半数となっています。国際結婚等の家庭の多くは中国にルーツをもち、このような家庭の児童生徒の多くは、学校では日本語を話し日本の文化に触れていますが、家庭では中国語を話し中国の文化に触れながら生活しています。個々の環境は多様ではありますが、そこで育つ児童生徒はバイリンガル・バイカルチュラルの人材として成長・活躍する可能性をもちます。また、共に学ぶ児童生徒にとっても、多文化社会の中で生きる力を育むというメリットがあります。

これまで日本語指導が必要な児童生徒に対しては、日本語指導担当教員と在籍学級の担任とが連携を図りながら、一人一人に合わせた支援を進めてきました。そこで2020年度には、日本語指導の時間だけでなく、学校全体で多文化共生の視点を取り入れた授業実践を行っていくことで、児童生徒のもつ多様性を授業の中で生かすとともに、これからの多文化社会の中で生きる力を培っていくこととしました。

多文化社会の中で生きる力としては、①寛容性、②批判的思考力、③創造力の3つを定め、授業の中でそれぞれの力を育成するための手立てを考えました。

① 寛容性の育成

寛容性とは、それぞれの違いを認めた上で、その違いを尊重する態度のことを表しています。寛容性を育成するための具体的な実践例として、国際的なルーツをもつ児童生徒が授業内で文化的に受け入れられ、活躍する場面を作ることが考えられます。現地の情報や考え方をすることは、多様なものの見方や考え方を育むことに繋がります。また、児童生徒が活躍する場面を作ること、一人一人の自己肯定感を高めることもできるでしょう。多様なものの見方・考え方を身に付け、自分をかけがえのない存在として認めることができこそ、他者の存在を認め、共生することが可能となると考えます。

② 批判的思考力の育成

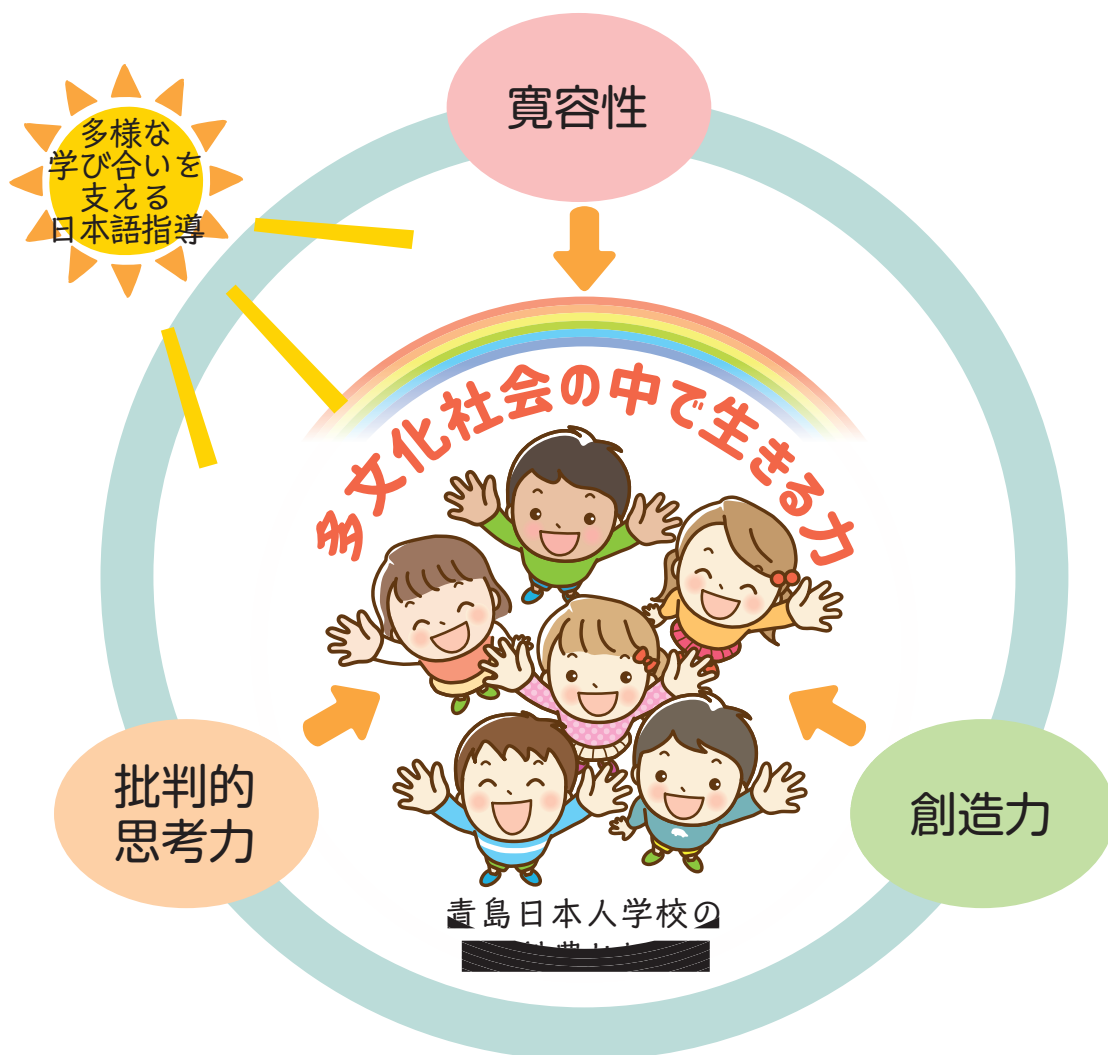
批判的思考力とは、新しいものの見方や考え方を知り比較・検討する中で、差異を正しく理解して、これまでの自分の考えを振り返り、新しい考えを構築する力を表しています。批判的思考力を育成するための具体的な実践例として、日本の文化や常識を他国の文化や常識と比較・検討し、児童生徒が自らの考えを変容させていくものが考えられます。自分がこれまで知らなかったことを知ることで課題が明確になったり、より深く考えたりすることが可能となります。

③ 創造力の育成

創造力とは、他者と関わり学び合う中で、既存の物を組み合わせたり、変更・修正したりして、新しい価値を生み出す力を表しています。創造力を育成するための具体的な実践例として、課題解決型の学習が考えられます。児童生徒自らが課題を設定し解決していく過程の中で、バイリンガル・バイカルチュラルな児童生徒の多様な考え方は、全ての児童生徒にとってプラスとなるでしょう。協働的な学びの中で、多様な考え方や価値観に触れ、予想とは異なる結論を導いたり創造的なアイデアを作りだしたりすることは、これからの多文化社会の中で必要となる力となります。

また、これらの3つの力はそれぞれが独立したものではなく、相互に関わりながら高められていくものです。児童生徒の発達段階に応じて、関連付けながら高めていくことで多文化社会の中で生きる力になると考えます。

以下が多文化社会の中で生きる力のイメージ図です。



参考文献：佐藤郡衛・中村雅治・見世千賀子・近田由紀子 他 『海外で学ぶ子どもの教育』明石書店 令和2年8月20日 76頁～101頁
佐藤郡衛 『多文化社会に生きる子どもの教育』明石書店 令和元年9月14日 96頁～116頁

実践
1

実践
2

実践
3

実践
4

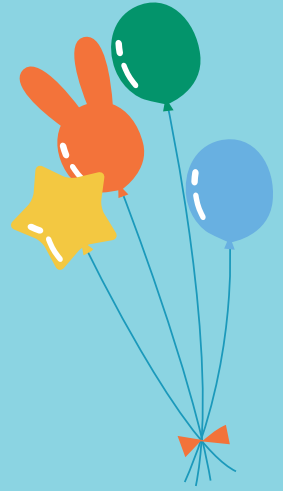
実践
5

実践
6

実践
7

実践
8

実践
9



多文化共生の学校づくりの事例

多様な学び合いを支える日本語指導

本校は、在籍者の約半数がさまざまな国のルーツを持つ児童生徒であることから、もともと多様性に富んだ環境にあります。しかし上の学年になるほど無意識に日本の価値観、ルール、習慣などに合わせるような場面も見られました。そこで児童生徒が自分の生まれ育った背景に誇りをもち自分らしさを発揮できるような関係づくりをし、多様な価値観を大切にしていって学び合えるような取り組みを始めました。

そのために、日本語指導担当教員の役割を組織上明確にし、個別の日本語指導や在籍学級での支援ができるように体制を整えています。全教職員と連携しながら、さまざまな国のルーツを持つ児童生徒の背景にある文化や習慣にも目を向け、お互いが尊重し合える関係を構築し、学校生活・学習で「日本語力の向上」と「多文化共生の学校づくり」の両軸を意識して日々の指導にあたっています。

2019年度を取組例

① 課外の日本語教室（小1）

小学部1年生を対象に、毎週金曜日の課外に45分間の日本語教室を開設しました。開設するにあたって入学前に日本語指導が必要な児童の保護者と相談し、入学直後から日本語教室での学習を開始しました。

1学期は1日も早く周囲とコミュニケーションがとれるようにするための「生活に必要な日本語」を、2学期からは台北日本人学校の取組を参考にして「国語や算数などの教科の先行・補充学習」を中心に行いました。2月から新型コロナウイルスの影響で休校となったため、日本語を使って活動する時間を確保するため、2・3月はオンラインによる日本語教室を実施し、1年間の復習を行いました。

② 中学部・個別の日本語指導（中1・中2）

中学部の2名の生徒に対し、在籍学級が学級活動や部活動の時間に、週1回の個別の日本語取り出し指導を行いました。2人とも小学部高学年の時に現地校から編入学してきた生徒です。生活言語能力はさほど問題ありませんが、学習言語能力に課題があるため、日本語指導担当はできるだけ在籍学級の授業を見に行き、在籍学級の学習に参加し活躍できるようワークシートの書き方や音読・発表練習などを個別指導の時間に支援しました。休校期間中は日本語の語彙を増やす機会ととらえ、週1回オンラインによる指導を行いました。

③ 在籍学級での日本語指導

小学部1年生の在籍学級担任と日本語指導担当が連携し、教科内容をあらかじめ学習したり、分からなかったところを補充したりしました。

毎週末に日本語教室での学習について在籍学級担任と日本語指導担当が打合せをします。在籍学級担任は、日本語教室での学習の様子も参観しているので、その成果を生かしながら授業を行いました。

2020年度取組例

① 課外の日本語教室（小1・小2）

対象を小学部1・2年生に広げて実施しています（小1金曜日、小2月曜日）。

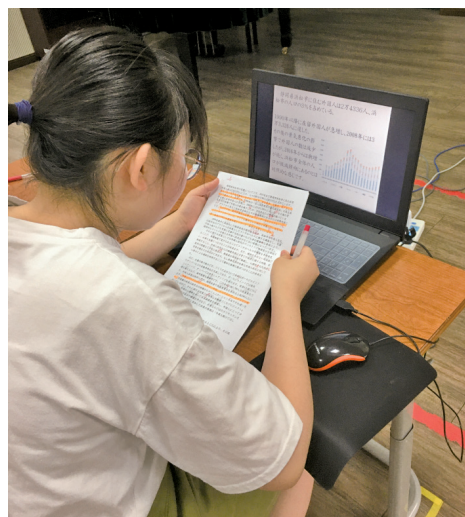
- ・ 小1：休校中（4・5月）はオンライン日本語教室を週2回行い、自己紹介や持ち物、教室での言葉などを学習しました。学校再開後（6月～）は学校生活に必要な日本語（わすれた／かして／ありがとう／けがをしました／あたまがいたいです、など）を、ロールプレイやインタビューを多く取り入れ、発話重視で進めました。2学期からは教科の先行・補充学習を中心に学習を行っています。
- ・ 小2：休校中はオンライン日本語教室を週1回実施し、国語の先行学習を中心に行いました。学校再開後は学級担任と相談しながら、国語と算数の先行・補充学習を行っています。また、9月には日本語指導担当と在籍学級担任とで、児童の日本語能力を把握するためにDLAの4項目（話す、読む、書く、聞く）のアセスメントを数回に分けて実施しました。この結果を在籍学級での指導に生かしています。

② 中学部・個別の日本語指導（中1・中2・中3）

始業式後に対象生徒の保護者と今年度の日本語指導の実施方法についてオンラインで相談しました。休校中は週1回オンラインによる個別指導、学校再開後は中国語や部活動の時間に取り出し指導を行っています。担任・教科担任に授業の様子を聞いたり、担当が在籍学級の授業の様子を見に行ったりしながら、その時に必要な教科学習内容を精選・焦点化して指導しています。



小2 片仮名の言葉を使った文を書いている様子



中3 社会科の発表練習

③ 在籍学級での日本語指導

小2国語 <理解支援・表現支援としてのワークシートの活用>

「どうぶつ園のじゅうい」では、JSL カリキュラムの5つの視点より理解支援と表現支援に着目した写真入りのワークシートを作成し、それをを用いて獣医の仕事の工夫や自分の考えをまとめました。Y児は動物好きということもあり、獣医の仕事だけでなく、獣医の処置を受ける動物の気持ちを発表することができました。獣医の視点で書かれた説明文に動物の視点が加わり、在籍学級全体の獣医がする仕事の工夫の理解に深みが増しました。

中2国語 <ICT を活用した日本語支援>

毎時間の授業後5分間(1週間で20分間)、教科担任が音読指導や補充指導を行っています。継続して指導することで学習言語が少しずつ定着しています。また、学習アプリの録音機能を活用して教師が予め録音しておいた音読を課題として出題しています。生徒はそれを聞きながら音読練習を行い、録音したものを教師へ送ります。この取組により、学校と家庭でつながりのある学習、指導ができるようになるとともに学習の積み重ねが一目でわかるようになりました。音読指導を続けたことで、生徒は、これまで苦手としていた授業での音読にも自信をもって取り組むようになるなど、日本語習得に対する意欲の向上が見られました。



音読指導の様子



録音機能の活用

このように、青島日本人学校では「多様な学び合いを支える日本語指導」に取り組んでいます。なお、青島日本人学校日本語支援の詳細は、AG5 日本人学校・補習授業校応援サイト (<https://ag-5.jp/report/theme2-2>) に掲載されていますので、ご参照ください。

次ページからは、多文化共生の視点を取り入れた在籍学級での授業実践を紹介します。

中国で昔から親しまれている遊びを紹介しよう

むかしから つたわる あそびを たのしもう

(日本の小学校とのオンライン交流会)

指導者 岩本 梨花

1 単元の目標

- ① 昔から伝わる遊びを教わったり、一緒に遊んだりする中で、人と関わったり触れ合ったりすることのよさに気づき、進んで触れ合い、交流しようとすることができる。 **生活科**
- ② 日本の伝統的な遊びについて知り、日本に伝わる遊びのよさについて考えさせ、日本や郷土への愛情を深め、親しみをもって生活しようとする心情を育てる。 **道徳**
- ③ 世界の子どもたちの日常を写した写真を通して、他国の生活の様子について考えさせ、さまざまな国の人々の文化に親しもうとする心情を育てる。 **道徳**

2 単元について（多文化共生の視点から）

本学級の児童は、週に1時間程度、全員が中国語の学習を行っている。また、2人が国際結婚等の家庭の児童で、4月から継続的に課外での日本語教室で日本語を学びながら在籍学級の学習に積極的に参加している。

本単元では、中国語の学習で学んだ中国語や中国の文化を日本の小学生に伝えることや、日本語教室で学習した日本語によるコミュニケーションスキルを生かすとともに、全ての児童が中国の言語や文化に親しんだり、もっと知りたいという意欲を高めたりすることができる考えた。

オンライン交流会では、中国の昔から伝わる遊び（ジェンズ）を紹介する時間の前に、学級活動で自己紹介や簡単なゲームを行って交流する時間を作り、相手意識をしっかりとめた上で交流ができるようにする。また、遊び方を効果的に伝える方法を検討する場を設定し、意見交換する中で、伝える相手を意識し、写真や動画などICT機器を活用した説明の工夫も考える機会を作る。さらに、オンライン交流会を道徳の「にほんの あそび」、「せかいの こどもたち」という教材の導入として取り扱うことで、日本や中国だけでなく、世界のさまざまな国の子どもたちの生活や文化を知ったり、その文化に親しんだりすることのよさに気づくことができる。日本の文化と他国の文化を知り、それらを比較しながら、どちらのよさも感じ認め合う心情を育てることで、これからのグローバル社会を生きていくバイカルチュラル人材が育つと考える。

3 単元計画 (全8時間)

次	時	学習活動	ポイント (○多文化共生の視点、*日本語支援)
1	1	中国で昔から親しまれている遊びを楽しむ。 中国語	○中国で昔から親しまれている遊びを体験することで、学習に対する意欲を高める。
	2	山口県下関市立本村小学校の1年生と交流をする。学級活動	○中国語の紹介(色、数字)をし、一緒にゲームをすることで、進んでかかわろうとする態度を養う。 *中国にルーツをもつ児童が活躍できる場を設定し、自信をもって活動に取り組めるようにする。
2	3 4	中国で、昔から親しまれている遊びを紹介するための準備をする。生活科	○紹介する順番を考えたり、ICT機器を活用した説明の仕方を考えたりすることで、相手に伝わるように説明する方法を考えることができるようにする。 *説明の仕方に関する話型を示すことで、伝えたいことが伝わるようにするとともに、繰り返し練習することで自信をつけ、意欲的に活動に取り組めるようにする。
	5	山口県下関市立本村小学校の1年生と一緒に中国と日本の昔から親しまれている遊びをオンラインで紹介し合う。生活科	○進んで遊びを紹介したり、教わったりすることで、かかわったり触れ合ったりすることのよさに気づき、進んで触れ合い、交流しようとするができるようにする。 *わからない単語が出てきた場合には、相手に尋ねてもよいことを伝える。
	6	オンライン交流会の振り返りをする。生活科	○交流会で気づいたことやできるようになったことを振り返り、今後してみたいことを話し合うことで、中国や日本の言語や文化にもっと触れたいという意欲を高める。 *先に考えを発表させ、ワークシートに記述できるようにする。
3	7	日本に昔から伝わる遊びを知る。道徳 「にほんの あそび」	○教わった遊びを想起しながら、日本で昔から伝わる遊びを知り、日本の文化に触れることができるようにする。 *わからない言葉が出てきた場合は、実物を見せて理解できるようにする。
	8	世界の子どもたちの様子を知る。道徳 「せかいの こどもたち」	○紹介した遊びと関連させて、他の国の子どもたちのさまざまな遊びを知る。 *初めて知る遊びについては、実物を見せたり操作したりして楽しさを実感できるようにする。

4 資料



1次 ジェンズの体験（中国語）



1次 交流1回目（学活）



2次 交流2回目（生活科）



2次 交流2回目（生活科）

5 考察

① 児童の感想

- もっと交流会がしたい。中国の食べ物や中国語の形の言い方など、ちがうことも伝えたい。
- みんながジェンズのやり方をわかってくれてうれしかった。
- 日本の（他の小学校の）人にもっと伝えたい。

② 授業者の振り返り

児童たちは、自分たちが普段学習している中国語や中国の遊びが相手に伝わるようにと一生懸命学習に取り組んだ。また、相手から「楽しかった。」「もっとやりたい。」という声をかけられたことで、今後も色々なことを紹介したいという思いを強くすることができた。一人の国際結婚等の家庭の児童は、自分の祖母が中国の遊び（ジェンズ）を知っていることを他の児童にも紹介し、家庭でも練習して、

意欲的に交流活動に取り組むことができた。また、もう一人の児童は、自分から進んで日本の小学生に話しかけ、もっとたくさんの日本の小学生に中国のことを伝えたいと感想を述べた。

生活科だけでなく、学級活動、道徳、中国語の授業と関連付けて学習を行うことで、それぞれの教科の学習内容の理解を深めることができた。3次の道徳「せかいの こどもたち」の学習の中で、「世界の他の国の子どもたちとも交流してみたい。」や「言葉が通じなくても、動作やジェスチャーでも伝えればいい。」などの発言があり、他国の人々と交流することへの意欲を高めていた。さまざまな国の人々の文化に親しもうとする心情を育てることが、多文化共生への第一歩と考える。



多文化共生の視点からのコメント

他国の文化を受け入れたり、親しんだりすることは、「寛容性」の育成につながる。また、受け入れた文化を発信していくことで、情報発信の担い手として今後活躍することが期待される。青島に住んでいるからこそ、中国語や中国の遊びに触れることができる。また、体験を通して中国の遊びや文化のよさを感じる感性を育むことができる。低学年のうちから多様な遊び方や共通点などを体験的に学ぶ経験を積み重ねていくことが、多文化共生の社会をつくる人材を育てることにつながるだろう。

馬のおもちゃの作り方 / おもちゃの作り方をせつめいしよう

指導者 尾崎 亮介

1 単元の目標

- ① 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。 **知識・技能**
- ② 事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることができる。 **思考・判断・表現**
- ③ 事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる。 **思考・判断・表現**
- ④ 事柄の順序に沿って粘り強く構成を考え、学習課題に沿っておもちゃの作り方を説明する文章を書こうとする。 **主体的に取り組む態度**

2 単元について（多文化共生の視点から）

本学級は、男子4名、女子4名からなる少人数クラスである。本学級の児童は、就学前から中国の幼稚園に通っていたり、両親や母親が中国人の家庭であったりと中国にルーツをもつ児童がほとんどである。また、中国語を話すことができる児童も多く、中国語の授業では、日本から編入してきた1名を除いて全員が中級クラスで学習を行っている。中国語に慣れ親しんだ環境の中で、青島で生活する良さを感じている。一方、日本語での会話や文章の作成に苦手意識を持つ児童も少なくはないため、家庭での使用言語が中国語の児童（2名）は、課外の日本語教室で日本語の学習を行っている。日本語教室では、日本語の語彙を増やしたり、学習言語能力を高めたりして、在籍学級で活躍できるようにしている。本単元では、「書くこと」に焦点を当て、在籍学級と日本語教室での学習を通して文の特徴を捉え、説明文を書くことができるようにしていきたい。

導入では、説明文の工夫を見つけるために、実際に「馬のおもちゃの作り方」の説明文を読みながらおもちゃを作る時間を設ける。その中で見つけた説明文の工夫を生かして、自分たちが生活科の時間や普段の青島での生活の中で作ったことのあるおもちゃの作り方を説明文にしていく。児童の多様なアイデアや日本語力が十分でなくても自分の考えを表現できるように、本校で利用している学習アプリを活用し、写真

や図を入れたり、作り方の順番を入れ替えたりできるようにする。日本語教室では、教科書の説明でわからない部分を中国語やジェスチャーを使って、互いに馬のおもちゃの作り方を教え合うことで、説明の仕方を活動の中で理解していく。

3 単元計画 (全11 (2) 時間)

次	時	学習活動	ポイント (○多文化共生の視点、*日本語支援)
1	1	<ul style="list-style-type: none"> ●学習の見直しをもつ。 <ul style="list-style-type: none"> ・生活科の授業や家で作ったことがあるおもちゃについて紹介する。 ・「おもちゃの作り方をせつめいしよう」という学習課題を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> *ここで扱うおもちゃは、普段遊んでいる既製品のものではなく、日本の文化でもある「ものづくり」を意識したものを採用する。
2	2 3 4 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ●「馬のおもちゃの作り方」を読んで、説明の工夫を見つける。 <ul style="list-style-type: none"> ・実際に説明文を読みながらおもちゃを作り、分かりやすかったところや何度も読み返したところを確かめる。 ・文章のまとめや順序、接続詞を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> *時数(2)について日本語教室で馬のおもちゃを作りながら、説明文の順序や接続詞について確認する。
3	5 6	<ul style="list-style-type: none"> ●自分が説明するおもちゃを決め、説明の仕方を考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分が説明するおもちゃを決める。 ・「馬のおもちゃの作り方」や例文を見ながら、文の組み立てや順序、必要な写真や絵について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> *日本語が苦手な児童には、おもちゃの説明を考えるときに中国語で考えても良いことを伝える。
4	7 8 9 10	<ul style="list-style-type: none"> ●説明する文章を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・実際に自分の説明するおもちゃを作りながら文に必要な写真を撮ったり絵を描いたりする。 ・自分が決めたおもちゃの作り方で必要な説明を文に書く。 ●おもちゃの作り方を学習アプリを使ってまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・順序を意識しながら作り方の文を入れ替えたり写真や絵を文の中に入れたりする。 ・自分の説明文を読み返して、接続詞や順序について確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> *作り方だけでなく順序を表す接続詞も示したワークシートを用意する。 *自分の伝えたいことが伝わるように、書いた文を並べ替えたり学習アプリに文を取り込み、テキストに貼り付けたりする。
5	11	<ul style="list-style-type: none"> ●学習を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・完成した説明文を学習アプリで共有し、感想を伝え合う。 ・学習を振り返り、手順を説明するときに気をつけることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちの説明文のよさや自分の説明文との違いを見つけるために、全員の説明文を個人のタブレットで確認できるようにし、読む時間を設ける。

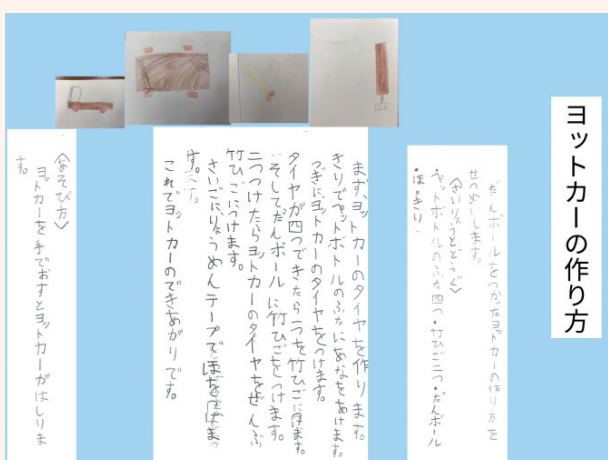
4 資料



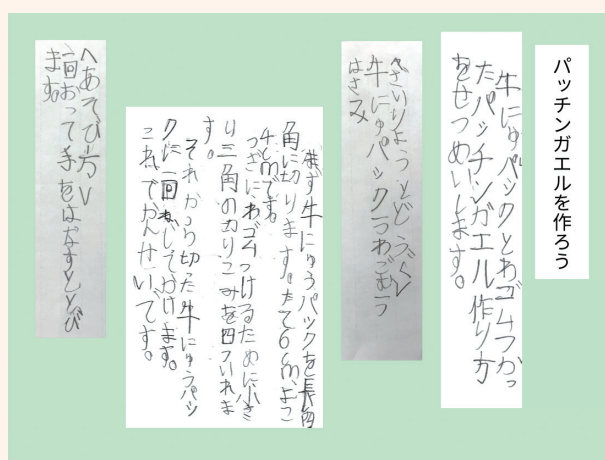
接続詞を使い、作り方の手順を確認している様子



作り方を教え合っている様子



I児の「ヨットカーの作り方」説明文



M児の「パッチングエルを作ろう」説明文

5 考察

① 児童の感想

- 順序を表す言葉を入れることで分かりやすい説明文になった。
- 数字を使うことで、より詳しい説明になると思う。
- 遊び方や工夫の仕方も入れることで、実際に作ってみようという気持ちになる。
- 「はじめ－何をやるか」「中－作り方」「終わり－遊び方」のまとまりを作ることによって簡単に説明文ができた。

② 授業者の振り返り

今回の単元では、教科書に載っている「馬のおもちゃの作り方」が児童の考える説明文のベースとなってくる。その中で良いと思ったところを生かし説明文を作り、文型を身につけていく。そのためにも「馬のおもちゃの作り方」の文型を児童が十分に理解する必要があると考えた。中でも順序を表す接続詞は作文だけ

でなく、日常の会話の中でも頻繁に使われるものであり、それがあらないでは、相手への伝わり方も変わってくる。本単元を通して、国語科でのお話作りや感想文を書くような単元の中で、接続詞を活用して文章を書く児童が増えた。これは日本語教室に通う2名についても同様で、今回の説明文を作るときの接続詞の大切さを知り、以前の会話で友だちにうまく伝わらなかった場面でも、より詳しく正しく伝えることができるようになり、他の児童との関わりがより深いものとなったと言える。また他の児童も会話の中でその変化を感じたのか、以前は日本語が分からないからと過度な助言をしていたのが、少し言葉に詰まることがあっても話を聞くという姿勢が見受けられ、日本語が分からないからという考えが払拭されたように感じる。



多文化共生の視点からのコメント

本題材は、本校の授業実践の視点の「創造力」の育成にあたる。教科指導だけでなく、日本語教室との連携で、自分の思いや考えを相手に正しく説明する力を身につけることができた。本単元を通して身につけた説明する力は、相手に伝えることを目的とするため、さまざまな文化や考えに触れ合う友だちに自分のことを伝えるための一助となると考える。

さまざまなルーツをもつ児童の強みを生かして

三年とうげ

指導者 古川 貞之

1 単元の目標

- ① 人物の気持ちの変化について、民話の組み立てに沿って具体的に想像することができる。 知識・技能
- ② 様子や行動を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使う語彙を豊かにすることができる。 思考・判断・表現
- ③ 組み立てや人物の気持ちの変化について捉え、学習課題に沿ってさまざまな国の民話を紹介しようとしている。 主体的に学習に取り組む態度

2 単元について（多文化共生の視点から）

本単元では、民話によくある組み立てを捉えたうえで登場人物の変化を考える活動と、学習したことを生かして民話のおもしろさを紹介する言語活動を設定している。教材となる「三年とうげ」は朝鮮半島に伝わる民話で、大阪生まれの在日二世である作者が子どものころ両親や祖父母に聞かされた話を作品にしたものである。場面の様子や登場人物の言動が分かりやすく表現されており、それらの言葉から内容を豊かに読み取ることができる。単元後半では他の民話に読み広げ、おもしろいと思うところを紹介する言語活動に取り組む。

民話とは、その地域に住む人々の生活から生まれ、語り継がれてきた話で、昔話や伝説などのことである。よって民話は世界中に存在し、その中でも有名なものは日本でも書籍化され、教科書の中でも扱われている。私たちは知らず知らずに他国の民話についても耳にしているはずである。そこで、単に民話を選んで紹介するだけの活動にとどまらず、民話が語られていた国にも意識を向けさせ、児童それぞれのルーツにつながる民話の紹介をする言語活動を設定する。本学級は日本、中国、韓国にルーツをもつ児童が在籍している学級でもあるため、それぞれの児童の強みを生かすことで、それぞれのルーツに自信と誇りをもつこと、お互いのルーツへの寛容な態度をもつことへとつなげることができる。取り上げる民話は児童それぞれが選ぶものとするが、児童のルーツにつながる国の民話を読んだり、両親に語り聞かせてもらったりして互いに紹介し合う活動を行う。



3 単元計画（全8時間）

時数	学習活動	ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
第1時	<ul style="list-style-type: none"> 知っている民話を発表する。 「三年とうげ」のおおまかな内容を捉える。 民話について読み広げる意欲をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○民話はさまざまな国にあることを知らせ、今まで習った「おおきなかぶ」「スーホの白い馬」も世界の民話であることに気づき、自分にルーツのある国の民話に興味をもたせる。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> 民話に当てはまる組み立てを知り、「三年とうげ」の組み立てを捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> *民話によくある組み立て例を確認し、捉えやすくするためワークシートを提示する。
第3時	<ul style="list-style-type: none"> 物語を通して、誰が、何によって、どのように変わったかを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> *焦点化して読ませるため、登場人物の行動や様子を表す言葉を抜き出し示す。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> 「三年とうげ」のおもしろいと思ったところをまとめる。 お互いに発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> *自分の考えを発表できるようにモデル文やキーワードを示す。 ○着目した観点やおもしろいと思った理由を比較させるため、電子黒板に提示する。
第5・6時	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ民話を読み、内容を捉える。 日本語で説明するための翻訳を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> *選んだ民話の内容を捉えやすくするため、物語の組み立てに沿ってまとめられるワークシートを示す。 *聞き取りを行いながら、日本語での説明が難しい言葉を児童が翻訳できるように電子辞書を用意する。
第7時	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ民話のおもしろいところをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> *紹介する内容を自分でまとめることができるように、例文を示す。
第8時	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ民話のおもしろいところを紹介する。 単元の学習を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の民話に興味をもって聞くことができるよう、原文の本も示す。 ○着目した観点やおもしろいと思った理由を比較させるため、電子黒板に提示する。 ○学習内容を具体的に引き出し、単元を通しての振り返りができるようにする。世界の民話についても振り返りまとめとする。

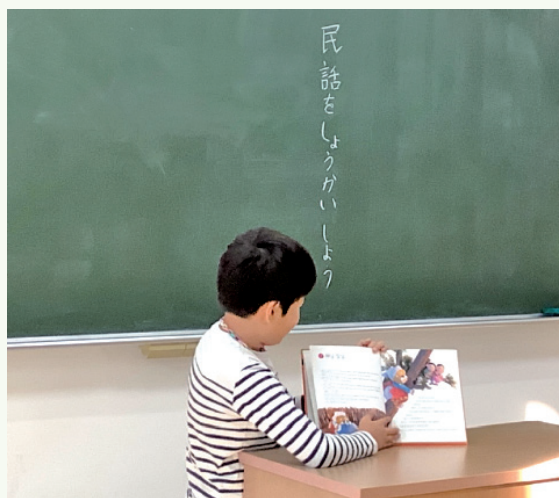
4 資料

その理由	おもしくかったところ ・ 出来事 ・ 人物の変化 ・ 言葉や文 など	どんなお話か ・ 登場人物 ・ 大きな出来事	この国のお話か	題名
	たぬき(か)つをわたりか (は)んこ・あひこ(ら)い た(き)んが(き)に(あ)る	いじめられてたぬき(か)つ さん(が)を(き)て(く)れ(ま)し(た) その(よ)う(な)つ(き)に(あ)る た(ぬ)き(か)つ(が)入(り)ん(ご)う に(お)い(し)て(は)あ(そ)に(あ)る た(ぬ)き(か)つ(が)あ(そ)に(あ)る た(ぬ)き(か)つ(が)あ(そ)に(あ)る た(ぬ)き(か)つ(が)あ(そ)に(あ)る	日本のぐんまのたてはや市 もりんぎ	ぶんぶくちやがま

日本の民話をまとめたワークシート



中国語の本を二人で翻訳している様子



韓国語で書かれた絵本を見せ紹介している様子

5 考察

① 児童の感想

- ・ 世界の民話もおもしろいなと思った。
- ・ 韓国の民話で、空からひもが下りてきたところが良かった。
- ・ 「ぶんぶくちやがま」の話は初めて聞いたけど、タヌキが茶釜に変身して綱渡りをするのが面白かった。
- ・ 民話はおもしろかった。自分も面白い話を書いてみたい。
- ・ 中国の民話には龍、韓国は虎がよく出てくる。日本は鬼が出てくる話が多い。

② 授業者の振り返り

単元導入時から民話を紹介し合うことを伝えていたので、単元後半の民話を紹介する活動においてもとても意欲的に取り組めた。それぞれが自分のルーツのある国の民話を紹介することを選び、家から本を持ってきたり、家族に聞いて調べ

たりしていた。本を持ってきたときには、「見て、見て」と嬉しそうに見せ合う姿が見られた。児童はそれぞれの言語を話したり読んだりできるが、各言語で書かれた本を日本語で紹介するにあたり、必要に応じてタブレットで翻訳しながら紹介文を作成した。

民話を紹介し合うときには、発表する側も聞く側もとても楽しそうで、内容も組み立てに沿って分かりやすく紹介することができていた。一通り発表し終わった後には、児童から「本を読んで紹介したい」との提案があり、希望者だけではあるが、本を朗読して紹介することもできた。

この学習を通して、自分のルーツに誇りをもつことと、国によって文化や歴史は違うがその違いが面白いことを感じ取ることができたと思っている。

多文化共生の視点からのコメント

これは本校が大切にしている三つの柱のうち、主として「寛容性」を育む授業実践である。児童は1年時にロシアの民話「おおきなかぶ」、2年時にモンゴルの民話「スーホの白い馬」を学習しており、3年時では朝鮮半島の民話「三年とうげ」とすでにさまざまな国の民話に触れてきている。しかし、これらの民話を国語科の目標を達成するための教材とだけ捉えると、その国や作者のこと、お話に出てくる挿絵や風習、象徴的な動物など、意識せず終わってしまうこともあるのではないだろうか。今回の民話を紹介し合う活動も教科書で取り扱われている内容であるが、国語科の目標達成とともに多文化共生の視点で教材を見つめ展開することで、より深みをもった活動へと広げることができると考えている。

今回の活動を通して、児童は民話の楽しさだけでなく、自分のルーツを紹介することに対しても楽しさを感じていたと思う。またそれを聞いていた他の児童も、お互いのルーツのこと、さまざまな国の民話のおもしろさや不思議さなどの文化を柔軟に受け入れることができたと思っている。このように、多文化共生の視点を意識することで、教科指導の中でも幅広く教材を活用することができる。さまざまな角度から児童や教材を捉え授業展開していくという視点を磨きながら今後も実践していきたい。

日本の音階と世界の音階の共通点と差異点を見つけよう

日本の子もり歌と 諸外国の民謡の比較

指導者 岡本 直恵

1 題材の目標

- ① 日本と世界の諸民族の音楽の特徴について調べる活動を通して、世界には民族固有の音楽があることを理解し、曲想に合った弾き方を工夫したり、歌ったりする技能を身に付ける。
知識・技能
- ② 各国の音階やリズムなどの特徴について考え、それらが生み出す各国の曲想の雰囲気味わって聴いたり、琴や二胡を弾いたりすることで、どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて、思いや意図をもったりする。
思考・判断・表現
- ③ 日本と世界の音楽の共通点や差異点について理解し、それを生かした表現をしたり、各国の音楽のよさなどを味わいながら聴いたりする学習を通して、多様な音楽への興味・関心を深める。
主体的に学習に取り組む態度

2 題材について（多文化共生の視点から）

中国の伝統音楽は陽音階が多く、日本の「子もり歌」などの古謡やわらべうたも5音音階（陽音階・陰音階）で作られている。そこで中国の小学校音楽の教科書（各学年上下巻、全12冊）を購入して調べたところ、日本の曲として「とんび（鷹）」（3年上）、「赤とんぼ（紅蜻蛉）」（4年上）が掲載されていた。いずれも旋律は5音音階で作曲されている曲であり、どちらの国にとっても親しみを感じる旋律である。親から子へと歌い継がれ、生活に根差し、DNAに染み込んでいる音階が、中国と日本は共通している。

本題材では、まず、我が国の古謡「子もり歌」を学習し、5音音階による音の特徴や構成上の特徴を理解させる。そして、諸外国の「生活に根差した音楽（民謡）」を取り上げ、音階や音楽的特徴を調べ、共通点や差異点を探ることで、日本の音楽を知り、また世界には多様な特徴を持つ音楽があることを知るきっかけとしたい。児童が主体的に諸外国の音楽を学習し、自国の音楽との共通点・差異点を発見することは、他国の特徴を知り、ひいては異文化を理解することにつながる。音楽を通して異文化を体験することで、共に生きていくための資質や能力の育成を図ることができると考える。



なお本題材で使用する教材については下表の通りである。

教材	国名・種類等	音階	教科書扱い
子もり歌	日本・古謡	5音音階（陽音階・陰音階）	5年
茉莉花	中国・民謡	5音音階（陽音階）	参考曲（昨年度5年）
アリラン	韓国・民謡	5音音階（陽音階）	参考曲（昨年度5年）
チェッ チェッ コリ	ガーナ・あそびうた	3音音階（ミソラ）	1年
きらきらぼし	フランス・民謡	7音音階	1年
子ぎつね	ドイツ・民謡	7音音階	2年
山のポルカ	チェコ・民謡	7音音階	2年、3年
いろいろな木の実	西インド諸島・民謡	7音音階	4年
リボンのおどり	メキシコ・民謡	7音音階	5年

3 指導計画（全4時間）

時数	学習活動	ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
第1時	<ul style="list-style-type: none"> 「子もり歌」の2つの旋律の違い（陽音階・陰音階）を感じ取り、日本の音階の特徴について学び、旋律の感じを生かした歌い方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○2つの旋律を実際に箏で弾き、感じの違いを確かめることで、自国の音階の特徴に気づくことができるようにする。
第2時	<ul style="list-style-type: none"> 諸外国の音楽と我が国の音楽との共通点や差異点についての調べ学習を行う。その国の生活に根差した音楽を取り上げるため、小1～小5の教科書に掲載されている各国の民謡、わらべうた、あそびうたの中から選曲する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○各自が興味を持った曲を選択し、その音楽的特徴を調べることで、自国の音楽との共通点・差異点について考える。
第3時	<ul style="list-style-type: none"> 各自が調べた民謡の特徴について学習アプリでまとめ、プレゼンテーションを行う。 調べた音楽を全員で歌唱する。その際、諸外国の音楽と我が国の音楽との共通点や差異点を基にして表現の工夫ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> *調べるポイント（音階、リズムの特徴、伝統楽器など）と発表における適切な文型を示すことで、調べた内容を日本語で発表できるようにする。
第4時	<ul style="list-style-type: none"> 「茉莉花」を中国の伝統楽器（二胡、中国琴）で演奏する。中国の陽音階の響きを味わいながら演奏し、日本の音階との共通点や差異点を述べ本題材のまとめとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○主旋律を中国琴、飾りの旋律を二胡で演奏する。また中国語による歌唱もあわせて行うことで中国の音楽の雰囲気や特徴をつかむとともに、自国の音楽との共通点や差異点について自分の言葉でまとめることができるようにする。

4 資料



第1時より（箏の演奏）



第2時より（調べ学習）



第3時より（調べ学習発表会）



第4時より（茉莉花の演奏）

5 考察

① 児童の感想

- 二胡や中国琴は中国の楽器なのに日本の楽器のような印象なのは、音階が似ているからだと思った。
- 「茉莉花」は日本でもよく知られている曲だし、中国の民謡の音階は日本と同じだということが分かった。
- インド民謡はインドの文化や食べ物をテーマにしている曲が多いなと思った。
- アフリカの民謡はリズムがいいと思う。アフリカだけでなく、いろんな国の民謡を知りたいと思った。
- アリランがどうやってできたのかについて知ることができた。地方によっていろんなアリランがあることも分かった。
- 日本と中国の琴では弾き方が違うから、響き方も全然違うと思いました。でも音色はちょっと似ているなと思いました。

② 授業者の振り返り

本学級は5人中3人が国際結婚等の家庭の児童であり、1人は日本に住んだことのない児童である。日頃から自分の背景についてオープンに話すクラスであるため、特に第2時の「自分のルーツにつながる民謡の調べ学習」には大きな関心を持って取り組んでいた。「アリラン」を調べたA児（韓国にルーツがある児童）は曲の背景を説明するだけでなく、韓国語で歌詞を朗読したり歌唱したりと表現を加えて発表していた。B児（中国にルーツがある児童）は「茉莉花」を調べるうちに中国の伝統楽器にも興味を持ち、たくさんの伝統楽器を紹介していた。第4時の二胡と中国琴による「茉莉花」の演奏では、中国の楽器の音色の美しさや音階の特徴を全身で味わっている様子が見られた。本題材は、音楽を通して異文化を理解するきっかけとなったと思う。



多文化共生の視点からのコメント

本題材に一番関わりがあるのは「批判的思考力」の育成である。これまで日本の文化・価値観の中で育ってきた児童も、日本以外の国にルーツがある児童も、文化相対主義の視点から諸国の文化の差異を正しく理解し、どの文化もかけがえのないものだ、という考えに立つことができるように学習活動の流れを考えた。本題材を通して、自国の音楽のよさを味わうとともに、世界にはいろいろな音楽があることを知り、諸国の文化にまで目を向けることができたといえる。

さまざまな文化をもつ人たちが共に平和に暮らす社会をめざして

わたしたちの平和島

(日本の小学校とのオンライン交流会)

指導者 迎 香純

1 単元の目標

- ① 日本と中国に住む同世代の児童と交流することで、自文化・他文化に触れ、多文化理解を深める。
- ② 意見交流をする中で、多文化共生に関心をもち、国際人としての資質を育む。

2 単元について（多文化共生の視点から）

① テーマの設定

身の回りには、さまざまな文化を背景にもつ人がおり、その中で互いを尊重し合い、ともに生きていく「多文化共生」が必要不可欠であり、それが望まれる時代にある。

今回交流する長崎県の小学校の校区内には米軍基地があり、アメリカのルーツをもつ児童が在籍している。また青島日本人学校は校内の約半数が国際結婚等の家庭であり、中国や韓国にルーツをもつ児童が在籍している。さまざまな文化を互いに理解し合い、望ましい関係を築くためには、どのようなことを心がければよいか、一人一人が考えをもって行動できるよう、このテーマを設定した。

② テーマの内容

「平和島」は、名前の通り平和に過ごせるよう願いを込めて作られた架空の島である。島の中央にはオアシスがあり、豊かな資源を手に入れることができ、オアシスを源流とする4つの川もある。

そこに日本、中国、韓国、アメリカのルーツをもつ人たちが集まった。人々が暮らしていくうちに、同じルーツをもつ人同士が集まり、コミュニティが形成された。次第に国境のようなものも生まれ、さまざまな問題も発生しだす。住人たちは、このままではいけないと解決方法を考えることにした。そして、どのような島になってほしいか「平和島」のあるべき姿についてそれぞれが思いをもって新たな生活を始める。

3 単元計画 (全 10 時間)

	学習活動	ポイント (○多文化共生の視点、*日本語支援)
第1次	<ul style="list-style-type: none"> 自分自身をふりかえり、自分の考えや価値観が形成されたルーツがあることを確かめる。 「平和島」の概要を知り、課題をつかむ。 	○互いの文化のよさを認め合い、それぞれのルーツに誇りをもてるような環境づくりをする。
第2次	<ul style="list-style-type: none"> 「平和島」で起こり得る問題と解決方法について、自分の考えをもち、ペアで話し合う。 考えをスライドにまとめ、発表する。 	*中国・韓国と日本のルーツをもつ児童をペアに振り分けることで、互いに教え合えるようにするとともに、日本語の困り感を減らして自信をもって伝えることができるようにする。
第3次 本時	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを発信し、相手の考えを聞き、共通点や相違点を知る。 話し合いを通して、自分の考えを深め、多文化共生のために必要な考えや行動に気づく。(オンライン交流)。 	○客観的に物事をとらえ、自分の考えを表現するとともに、相手の立場を尊重し、理解しようとする態度を大事にする。
第4次	<ul style="list-style-type: none"> 実際に異文化に触れる場面を想定し、どのような考えをもち、行動すればよいか、話し合いを通して、自分自身の答えをもつ。 	○視野を広げ、実生活での例を取り上げて、何ができるか自分事として考えを深める。

4 資料

第1次 スライド資料



第2次 ペア話し合い・発表練習



第3次 オンライン交流会

個人レベルの問題(意識の問題)

差別問題

- 別の国の文化を学ぶ機会を作り、文化を理解する
- 相手の身になって考える

文化の違いによる問題

- 別の国の文化を学ぶ機会を作る(交流会など)
- 国それぞれの特徴を理解し、相手の気持ちを考えて行動する

組織レベルの問題(体制の問題)

環境問題

- 環境に関するルールを決める
- (水はきれいにしてから流す・リサイクルする・植物を育てる)

言語の違いによる問題

- 四か国語全部を書く
- 通訳などの仕事を作る
- 言葉を学び、理解する(やりたい人だけ)



平和島について児童が作成したスライド

討論テーマ

自分と違う文化を持つ人たちが、あなたのとなりの家に引っ越してきました。その人たちは、日本のルールや日本人の生活様式に合わせて過ごしていくべきだと思いますか。

5 考 察

① 児童の感想

- 自分たちと似ている考えや違う考えを聞くことができた。
- めざす平和島の姿では、アイデアを出し合うことができた。

② 授業者の振り返り

児童は「家の中では自由に過ごし、公共の場ではルールを守って互いに快適に過ごせるようにしよう」という結論を出した。また、互いの考えを聞き、ルールや生活様式に合わせる度合いは人それぞれだが、比較的似たような考え方を持っていることに気づいたようである。話し方や考え方など、生まれ持ったものは変える必要はなく、ありのままで過ごすことができること、ただし、公共の場（交通ルールやゴミの出し方、買い物の仕方、食事のマナーなど）では、自分自身も相手も困らずに生活できるのでルールを守った方がよいという考えにたどり着いたようである。

本校の6割の児童が「どちらかという日本ルールや生活様式に合わせていくべきだと思う」を選んでいる。日本での居住経験がない国際結婚等の家庭の児童がその選択をしていることがわかった。自分自身のものの見方や考え方を変える必要はないが、その国の法律や生活のルールに従って生活することは、自分にとって相手にとってもよいことだと述べている。日本での生活経験がないから

こそ、どのように行動すれば互いに気持ちよく過ごせるか当事者として考えているのではないだろうか。

青島日本人学校の児童の感想

思う ・ <u>どちらかというと思う</u> ・ どちらかというと思わない ・ 思わない	思う ・ <u>どちらかというと思う</u> ・ どちらかというと思わない ・ 思わない
<p> <u>なぜなら、日本に長い間住むなら、例えばゴミの出し方など、日本のルールに合わせてやらないと、自分が困ったり、相手が困ったりすることになるから。でも、自分の家で過ごす時は、日本の生活様式に合わせてなくていいと思う。(1人1人の自由)ご協力ありがとうございました！谢谢！</u> </p>	<p> <u>日本のルールおとは、合わせないといいな、ゴミ出しの仕方や、買物の仕方などは、合わせないといいなと思っても、家で生活の仕方や、考え方などは、変えられない。お法や、お法で過ごすのは、いいと思わない。ご協力ありがとうございました！谢谢！</u> </p>

多文化共生の視点からのコメント

平和島の解決方法の一つとして、「4か国に共通した新しい言語をつくる」といったアイデアが出された。そこで児童に、「明日からロシア語を話すようにします。と言われたらどうですか？」と問うと、それは困難なことだと口々に答えた。言語とは、その国や地域に古くから根付いたものであり、自然と「母語」として習得していることを児童自身が実感している。自分を形成する文化やルーツが深く関係する言語は、強いられて習得するものではないことに自分事として気づくことができた。さらに言語だけに限らず、ものの見方や考え方など強制するべきものではないことや、自分の文化と同様に、相手の文化も尊重すべきものだとも気づくことができた。つまり、自国に対して「批判的思考力」をもち、相手に対し「寛容」の心をもって接する態度が育まれたことがうかがえる。

平和島の学習を通して、多文化共生とは、「1つの共通のものに合わせる」のではなく、互いに違いを認め合い、「相手を尊重しながら、互いに心地よい関係や環境を形成していくもの」ではないかと児童自らが気づき、それぞれが多文化の中で生きる上での、ものの見方や考え方を身に付けるための第一歩が踏めたのではないかと確信している。

食文化や日常の習慣の比較

「常識の違い」について考えよう

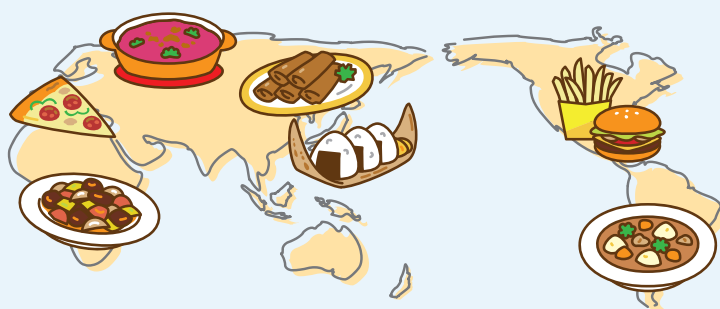
指導者 吉浦 梓

1 題材の目標

日本と他国では文化や価値観、考え方がどのように違うのかを、食文化や日常の習慣の比較を通して理解し、他文化を尊重する態度を養う。

2 題材について（多文化共生の視点から）

自国と他国の文化や習慣の違いで、驚かされることがあるが、相手の国からすればその逆も然りである。本校の国際結婚等の家庭の生徒の中には、他の生徒と比べお弁当の色どりや装飾が淡泊であることから、昼食の際に持参したお弁当を恥ずかしく思い隠して食べるシーンを見受けることがある。本題材では、日本人が普段から好んで食べている物や、当たり前だと思って過ごしている行動や生活習慣を取り上げ、それが他国では驚かれる行動だということに気づかせたい。そこから、国が違えばさまざまな違いがあるのは当たり前だということに気づくとともに、お互いの文化や習慣を認め合うことが大切だということを考える機会にしたい。



3 授業の流れ（1時間）

	学習活動	ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
導入	1.他国では好んで食べられている食べ物をスライドで見る。 <ul style="list-style-type: none"> • ウジ虫のチーズ（イタリア） • こうもりのスープ（台湾） • タランチュラのフライ（カンボジア） • サソリのフライ（中国） 	* 食べ物の写真を提示する（視覚的支援） ○ スライドから受ける印象から何が課題かを掴むようにする。
展開	2.ワークシートの以下の内容について考える。 ①「外国人が驚く日本の食べ物について考えよう」 ②「外国人が驚く日本人の習慣や行動について考えよう」 ③「自分が当たり前だと思って過ごしているけれど、他の国ではそうではない事例を調べてみよう」 ④「これらの違いは何から生まれるのか考えてみよう」	○ 他国の人から見たら驚かれる日本の食文化があることに気づくことができるようにする。 ○ 日本での生活経験がない生徒に、日本食のイメージについて感想を聞いたり、青島のおすすめの食文化を提案してもらったりする。 ○ 他国の人からという視点で自国・自分の生活習慣や行動を俯瞰して試みることにより、自分たちが普段当たり前だと思っていた行動が他国の人にとってはそうでないことに気づくことができるようにする。 ○ 日本人の習慣や行動を見たり聞いたりして驚いたことを共有する。 * 日本での生活経験がほとんどない生徒もいるため、具体物や写真を提示する。 ○ 宗教、国民性、食文化の違いなどから生まれるものだと気づくことができるようにする。よって違いがあっても当然であり、どちらが正しいということでもない、ということをおさえる。
まとめ	3.本時のまとめをする。	○ 国が違えば、さまざまな違いがあることを知り、それを認めることが大切である。逆に知らないと相手を傷つけることになるかもしれないということに気づくことができるようにする。

4 資料

① 授業の様子

一つ目の質問の選択肢の
どれを選んだかを挙手



② ワークシート（自作資料）

自分の常識は世界の非常識？！

Q:外国人が驚く日本の食べ物は何でしょう？
思うものに全て○を囲みましょう。

豆腐	マグロの目玉	すき焼き	卵掛けご飯	肉じゃが
豆ごはん	松茸	ちゃんこ鍋	漬物	あさりの味噌汁
たこ	甘エビ	白子	イカの塩辛	
こんにゃく	たらこスパゲティー	ちくわ		
ウニ	なまこ	卵焼き	長崎ちゃんぽん	ひじき
ちりめんじゃこ	栗の甘露煮	馬刺し	納豆	
すっぽん	わさび	うなぎ	鯛の塩焼き	鯖の煮つけ

Q:外国人が驚く日本人の習慣や行動は何でしょう？
思うものに全て○を囲みましょう。

電車のなかで寝る	自転車で会社に行く
マスクをしている	髪の毛を染める
放課後塾に行く	クリスマスにケンタッキー・フライド・チキンが人気
眼鏡をかける	緑茶を飲む
家の中では靴を脱ぐ	電車のアナウンス
大衆浴場でお風呂に入る	朝ご飯にバナナを食べる
ぶどうの皮をむいて食べる	印刷
	英語を勉強している

自分の常識は世界の非常識？！

Q:外国人が驚く日本の食べ物は何でしょう？
思うものに全て○を囲みましょう。

豆腐	マグロの目玉	すき焼き	卵掛けご飯	肉じゃが
豆ごはん	松茸	ちゃんこ鍋	漬物	あさりの味噌汁
たこ	甘エビ	白子	イカの塩辛	
こんにゃく	たらこスパゲティー	ちくわ		
ウニ	なまこ	卵焼き	長崎ちゃんぽん	ひじき
ちりめんじゃこ	栗の甘露煮	馬刺し	納豆	
すっぽん	わさび	うなぎ	鯛の塩焼き	鯖の煮つけ

Q:外国人が驚く日本人の習慣や行動は何でしょう？
思うものに全て○を囲みましょう。

電車のなかで寝る	自転車で会社に行く
マスクをしている	髪の毛を染める
放課後塾に行く	クリスマスにケンタッキー・フライド・チキンが人気
眼鏡をかける	緑茶を飲む
家の中では靴を脱ぐ	電車のアナウンス
大衆浴場でお風呂に入る	朝ご飯にバナナを食べる
ぶどうの皮をむいて食べる	印刷
	英語を勉強している

調べてみよう！自分の常識は世界の非常識

食品がフレイキアイル。大分あること。
チップを払わないこと。自己主張がないこと。
めんをやること。IKEAに①アイケイ②イケイ
男性がトイをあけてくれないこと。③お客様ニ神様
電車の中で押し合うこと。お年玉があること。
食器を持って食べる。タワニーのトイが自動。
公共の場でアルコールを飲むこと。温泉=温かいプール
クレーンをよぶために叫ぶこと。いらしゃいませー
ごはんをのこすこと。店員さんへ美声
おれをいじめること。ゴミを分別
列に並ぶこと。清掃員
チェックアウトで不正解。不正解。部活動があること。
飲食店で無料でおしぼりと水が出る。おしぼり。塾がある。(am school)
値引き交渉すること。4月か。塾がある。
食器を洗って食べる。入学。電車が正確
すぐおさまること。子供が一人でエレベーターのみおくり
おしぼり。電車。大人が私を誘ふこと。
水道水がぬる。エビゴ。残業=かんはっている。
おしぼり。おしぼり。海を渡る。信号を守る。

・食事の前に「いただきます」と言う。食事の後「ごちそうさまでした」と言う。
理 日本固有の文化です。・カッセルポテト
日本固有の文化です。
・毎日お風呂につかる。・水道水がそのまま飲める
理 日本固有の文化です。
・食器を持って食べる。
「大食い」として「コー達反」と思われることか物。√ヨは別している
・電車の甲のマーチ。静か
・空気を読む。自販機がぬる。物
自分の意見が思ったことはほつりと伝えます。・4月か入学の時月
・「お待たせ」・「ごめん」と言うことか物。・ゴミ箱があまりない
不思議と思ってる人か物。・エレベーター前のお見送り
・種類はすす。と音を立てる。エレベーター前のお見送り
・マーチがぬる。と不快を感じる。エレベーター前のお見送り
・おもてなしの習慣。エレベーター前のお見送り
・おしぼり。エレベーター前のお見送り
・エレベーター前のお見送り。エレベーター前のお見送り

5 考 察

① 生徒の感想

- ・ 国が友好関係を結ぶには、互いの生活習慣を理解するのが大切だと思った。
- ・ 非常識な行動をとらないようにするために、旅行に行くときは、その国のことについてよく知ってからいきたいと思った。
- ・ 日本と海外では行動にかなりの違いがあることを知った。
- ・ 外国人に驚かれる日本人の行動で「確かに！」と納得できることがたくさんあった。例えば「長財布をズボンのポケットに入れる。」行為は、治安の良い日本からできる行動だと思った。

- いろいろな国に行って外国の文化をもっと詳しく知りたいと思った。
- 日本では常識だと思っていたことが世界では非常識だからびっくりした。他国では非常識とされている行動はやらない方がいいと思ったが、日本ではしっかり日本の常識を考えた行動をとっていきたいと思う。

② 授業者の振り返り

日本と他国では、宗教、国民性、食文化などに違いがあることを知り、その違いを尊重することが大切であり、それを知らないと知らずに相手を傷つけてしまう可能性があることを考えさせた。

導入で、日本では食べる習慣のない食べ物を見せた時に、てっきり「嫌だ～」というような反応があると予想していたが、数人の生徒が「その国の人がおいしいと思っているなら食べてみたい。」という反応であったことに驚いた。本学級は国際結婚等の家庭の生徒や長期滞在家庭が多いため、日常から中国と日本の両方の文化を隣り合わせにし、家庭でも学校でも生活している。このような生活環境から、生徒は私が思っている以上に、多様な文化を受け入れる素地があることを実感した。

また、日本と中国では似ている点が多いということや欧米とは違いが多いということを考えていた。「同じアジア人同士」と考えると親近感を覚えることは自然なことであり、それも友好関係を築くうえで大切なことだと思うが、さらにアジア人・欧米人など人種や民族をひと括りに世界の人々を捉えるのではなく、国籍や民族を越えた「個々」として、世界中の人々と関わるることができる生徒を育成していきたいと思った。

多文化共生の視点からのコメント

本実践は、「寛容性」の育成を意識して授業を行った。自分の行動や習慣と相手のそれを比べ、違いが大きければ大きいほど、驚きや違和感や嫌悪感を感じてしまうことはある。この題材を通し、逆に日本人の行動も他国の人には驚かされている事実を、改めて知ることにより、どちらが正しいとかではなく、どちらも正しいのだということを考えさせることができた。

生徒は生活環境に起因し、私が思っている以上に高い「寛容性」の心をもっていた。このような授業を通し、これからもさらなる「寛容性」が育成されていくことを期待したい。

言語の平等を考える

「わかりやすく伝えよう！」

指導者 徳永 健治

1 題材の目標

自分が当たり前で生活している環境が、外国人や日本語学習者には心のバリアになっていることを理解し、その対策として誰にでも分かる「やさしい日本語」について考えることで、異なる文化に生きる人を尊重する態度を養う。

2 題材について（多文化共生の視点から）

外国人や日本語学習者のみならず、自分たちも外国に行ったら誰もが読めない人・書けない人になる可能性がある。「やさしい日本語」は言葉のバリアフリーの理念を実現する、ひとつの方法論である。「やさしい日本語」を使った言葉のバリアフリー、言葉のユニバーサルデザインへの努力によって、誰もが平等で公平に情報を得て、かつ発信できる社会につながると思われる。また、本学級の国際結婚等の家庭の生徒は、日本語を使う機会が学校生活だけという環境のため、「やさしい日本語」だけでなく「やさしい英語」や「やさしい中国語」についても考えさせたい。

3 授業の流れ（1時間）

	学習活動	ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
導入	① AとBの2種類のゴミ集積所の看板を比べ、どちらが多くの人にわかりやすく、伝わりやすいか考える。 ② 東日本大震災のときの状況を表した2コマの漫画を見て、問題点を考える。	○ 漫画を提示することで、誰にでもわかりやすく、伝わりやすい「やさしい日本語」とは、どんな日本語なのかに気づくことができるようにする。 ○ 中国語のみの看板やリーフレットを提示することにより、青島で暮らす日本人の経験についても考えるようにする。
展開	③ 上記②の「大津波警報が発令されました。至急、高台に避難してください。」を「やさしい日本語」に翻訳する。 ④ どのような状況にあるとき、伝わりやすい情報や「やさしい日本語」が必要であるか考える。 ⑤ 10の例文について、日本語学習者との対話において、どのように言い換えたらいいのか「やさしい日本語」に翻訳をする。	* ワークシートで、内容が難しい例文については、どのような内容が書いてあるか、日本語や英語、中国語を交えて個別に説明する。
まとめ	⑥ 振り返り	

4 資料



話合いの様子



意欲的に活動している様子

5 考察

① 生徒の感想

- 文字だけでなく図やイラストを使うと相手に伝わりやすかったです。
- あまり難しい言葉（単語）を使わず、簡単な言葉（単語）を使った方が相手に伝わりやすかったです。
- 漢字に『ふりがな』があると伝わりやすかったです。
- やさしい日本語だけでなく、やさしい英語とかやさしい中国語などがあると、わかりやすかったです。
- 日本語でしか説明されていないと、外国人には伝わりにくかったです。
- 相手に応じて、伝え方を変えたり、ひらがなだけにしたり、漢字が混ざったものにしたりと工夫が必要だと思いました。
- 「そもそも、日本語の意味も難しいな～」と改めて思いました。（日本人家庭の生徒）

② 授業者の振り返り

本学級は、日本人家庭の生徒1名、中国系家庭の生徒2名の計3名の学級である。「やさしい日本語」というテーマで、看板や緊急時のことを例に、外国人にも分かりやすい日本語と一緒に考えた。国際結婚等の家庭の生徒は、日本語を使う機会が学校生活だけという環境のため、「やさしい日本語」を考えるのに苦労しているようであったが、「やさしい英語」や「やさしい中国語」で考えてみる時間を設定することによって、簡単な言葉（単語）を使って説明すれば大丈夫ということで、安心して学習に取り組むことができた。

言語の平等を考える

「いくつもの言語とともに」

指導者 徳永 健治

1 題材の目標

自分がすでにもっている知識と学習スキルをさまざまな言語にうまく活用することで、複言語についての理解を深める。

2 題材について（多文化共生の視点から）

複数の言語を学ぶ能力は「すべての話者に内在する」ものと考えられている。こうした能力は、「複言語主義」という考え方の一側面として説明される。よく似た言葉に「多言語主義」があるが、「多言語主義」と「複言語主義」は考える単位が異なる。「多言語主義」が社会や組織、機関の中に複数の言語がある状態や、それを肯定する態度であるのに対して、「複言語主義」は個人に注目する。また、普段使っている日本語や英語、中国語以外の言語について考えることで、グローバルな視点で、さまざまな言語に対して積極的に寛容する態度を養いたい。

能力としての複言語主義	すべての話者に内在する、単独でないし教育活動によって導かれた2つ以上の言語を用いたり、学んだりする能力
価値としての複言語主義	言語に対する寛容性(※)を養い、その多様性を積極的に容認する基礎となる

※言語に対する寛容性とは、日本語のバリエーションを受け入れる（変だ、下手だ、などと言って拒否しない）という意味である。

3 授業の流れ（1時間）

学習活動		ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
導入	①中国語、インドネシア語、タイ語で書かれた同じ内容の文章について、何について書いてあるかを予測する。 ②韓国語、ドイツ語で書かれた曜日を見て、予測する。	○さまざまな言語について考えることで、積極的に言語の多様性に触れるようにする。 *ワークシートに書いてある内容について、日本語や英語、中国語を交えて個別に説明する。
展開	③スワヒリ語で書かれた数字を見て、書かれてある数字を予測し、更になぜそういう風に導き出したかについて考える。 ④中国語の文法規則について、できるだけたくさん推測する。	
まとめ	⑤振り返り	

<授業の様子>

- 海外旅行の経験から、タイ語で書かれている文章を見て、「これは多分タイ語で書かれていると思う」と発言した生徒がいた。
- 3つの言語で書かれた同じ内容の文章を見て、「これは同じ内容の文章ですか？」という質問をしてくる生徒がいた。その生徒に「なぜ、そう思うの？」と問いかけると、「3つの文章とも、2つの文に分かれていて、同じような言葉を使っているところがあるからです」と答えた。

⇒実際に1つ目の文章は中国語で書かれていたため、3人ともおおよその意味は分かっていた。しかし、残りの2つの文章については、1つはタイ語であると気づいた生徒もいたが、それ以外はほとんど分からない状況であったが、上記のような鋭い気づきにより、3つとも同じ内容ではないかと予測していた。

- 日本語、英語、中国語の3か国語を使うことができることで、他の言語に出会った際に、いずれかの言語のパターンを当てはめてみたり、柔軟に考えたりすることができると感じた。

4 考 察

① 生徒の感想

- 全く違う言語もあったし、日本語と同じような使い方をする言語があるということが分かりました。
- 自分の知らない言語がたくさん出てきたので、世界にはいろいろな言語があって面白いと思いました。
- 言語の決まりがあって分かりやすいものがあった。
- 同じ単語の繰り返しや同じ場所に使っている単語の意味は、予想しやすかったです。
- 全然違う言語だけど、共通している部分もあって面白いと思いました。
- 日本語と同じような使い方をする言語があったのでビックリしました。
- いろいろな言語を使っていて世界はとても広いということを感じました。

② 授業者の振り返り

『いくつもの言語とともに』というテーマで、いろいろな言語（言葉）に触れた。最初に、馴染みのある中国語の文章が出てきたことで、取り組みやすい雰囲気での学習をすることができた。インドネシア語、タイ語、韓国語、スワヒリ語などの複数の言語について考える中で、本学級の生徒は、普段使用していない言語に直面した際にも、あまり抵抗を感じていないようであった。

多文化共生の視点からのコメント

日本語を含めたさまざまな言語について考えることで、自分が普段学校で使っている日本語、授業や家庭で使っている英語や中国語について改めて考えることができたと思う。相手に伝わるようにするためには、自国の言葉だけでなく、多言語にも関心を持ち、どの言語を使い、どんな言い回しをすればよいのか考えることで、相手を受け入れ異なる文化に生きる人を尊重する態度や「寛容性」を養うことができるのではないだろうか考える。世界のさまざまな言語について触れたことで、どの言語にもやさしい表現の仕方があることに気づき、グローバルな視点で言語に対する「寛容性」を養い、更には多様性を積極的に容認する礎となってほしい。



私たちの生活と文化

指導者 小谷 勇人

1 単元の目標

- ① 現代社会における文化の意義や影響について理解している。 **知識・技能**
- ② 位置や空間的な広がり、推移や変化などに着目して、文化の継承や創造の意義について多面的・多角的に考察し、表現している。 **思考・判断・表現**
- ③ 私たちが生きる現代社会と文化の特色について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。 **主体的に学習に取り組む態度**

2 単元について（多文化共生の視点から）

本単元は、「我が国の伝統と文化」を学習内容として取り扱う。私たちの生活の中に我が国の伝統的な考え方や信仰、習慣などの影響が見られることや日本人の心情やものの考え方の特色などについて考察することにより、生徒たちの中にある日本人像を俯瞰する形で浮かび上がらせる。さらに、この考察を行ったのちに世界に広く受け入れられ、評価されている日本文化について学ぶことで、我が国の文化に対して誇りや愛情をもつことができると考えている。この誇りや愛情をもちながら、日本の中に見られる外国文化について学び、同じく価値のある文化として捉えることを通して、受容や寛容の心が育まれ、多文化共生や異文化理解の大切さにより気づくことができる。そこで、本単元の中で多文化共生のためには、異文化理解とともに自分の文化に対する理解を深めることが大切であると気づかせる仕掛けを、授業のさまざまな場面に取り入れて展開する。

また、単元の中のさまざまな場面において、青島に住んでいる自分と関連させながら日本文化や外国文化について考察する機会を盛り込んでいる。本校の約半数にあたる国際結婚等の家庭の生徒に限らず、青島で経験する文化は、すべての生徒にとって自分の文化の一部となっているはずである。日本人としての自分、青島で生きている自分というフィルターを通して、さまざまな文化に触れることはグローバル人材として成長するきっかけとなると考えている。



3 単元計画 (全5時間)

次	時	学習活動	ポイント (○多文化共生の視点、*日本語支援)
	1	文化が、わたしたちの生活において果たしている役割を調査する。	○科学・宗教・芸術を中心とした文化の役割と課題について、負の側面も含め、多面的・多角的に考察する。
	2	日本の伝統文化や中国（青島）の伝統文化がわたしたちの生活や物の見方・考え方にあたえている影響を調査する。	○日本と中国（青島）の衣食住、年中行事、冠婚葬祭などの生活文化をまとめ、共通点や相違点を見出した後に、私たちの生活に与える影響を理解する。
	3	世界に広く受け入れられ、評価されている日本文化について調査する。また、青島に関しても同じことが言えるのかペアで話し合う。	○スポーツや食文化など日本文化の中には私たちの住む青島や世界で広く受け入れられているものがあることに関心をもつ。青島は、日本料理店や空手や柔道教室などがある。これは世界的にも同じ傾向である。
1	4	在留外国人が多い地域ではどのような実態があり、どのように地域で生かそうとしているのか各自調査する。 地域①静岡県浜松市 地域②群馬県大泉町 地域③東京都新宿区 地域④埼玉県川口市	○日本社会における多文化共生と異文化理解の在り方について、具体的な地域の事例を基に、多面的・多角的に考察する。その際、その地域の青島との共通点や相違点についてもまとめる。(本授業を行った時には、日本からオンラインで参加している生徒もいた。その生徒は群馬県とのつながりが深かったので、地域の選定の際には大泉町を含めた) *日本語教室と連携して、言葉の意味や言い回しなどの確認などを行うことで発表の際の自信をもてるようにする。
	5	各自調査したことを発表する。その後、発表の内容を基に、多文化共生を実現するために、私たちに求められている態度は何か論述する。	○それぞれの地域の多文化共生への取組の実態から、多様な文化が交流し混じり合うことで、豊かな文化が生まれていることに気づくことができるようにする。また、多文化共生・異文化理解に積極的に参画しようという態度に至るようにする。

4 資料



〈実際の授業の様子〉

調べた感想と自分の意見

- 日本は労働力不足で外国人は大切な存在だからこそ、共存して「外国人」とひとくくりにせず、一人の人として向き合って共生していく必要がある。
- 私は青島に住んで日本人は外国人に対する免疫があまり無いと感じて、今の時代外国人は普通にいて私たち日本人と同じ人だからある意味普通に接したり、交流をたくさんしたりして外国人に対する免疫をつけたいと思う。
- 私は芝園団地とは逆に立場で青島に住んで、ここで感じた中国の人に嬉しかったことや困ったこと嫌だったことを自分が日本に戻った時に活かせるようにして外国人も日本人もともに過ごしやすい外国人のアイディアを活かしていけるようになればいいなと思った。

〈発表のスライドの中から埼玉県川口市の抜粋〉

5 考察

① 生徒の最後の論述から

私たちは外国人を歓迎する姿勢を示していかないといけないし、そうしないと外国人も日本社会に対して帰属意識は生まれないと思う。外国人は日本の地域活性化やグローバル化に良い影響を与える存在だから、無駄にせず活用していけるようにしたい。そのためにも、まず初めから自分たちとは違う人たちとは思わず、文化や価値観を知ろうとしていく必要がある。

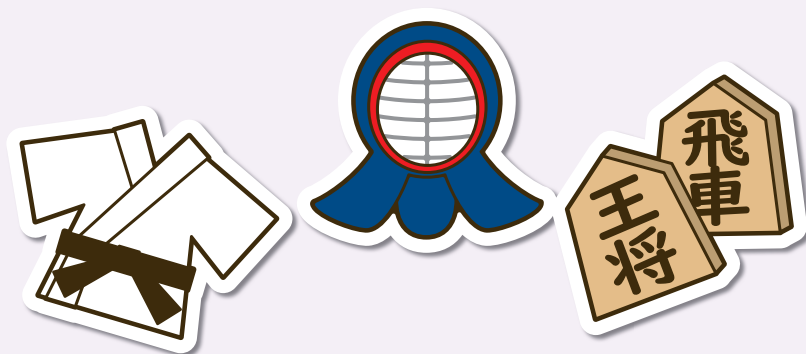
➡ 日本の中で外国人のもつ多様性をもっと生かしていくべきという多文化共生の考え方で自分の意見をまとめている。また、自ら外国人のことを知りたいと思いが芽生えているので、グローバル人材としての自分という考えも芽生えている段階に入っていると評価している。

外国人を受け入れる際に、文化や言葉の違いで壁を感じた。互いの文化を組み合わせた祭りなどを開催したら、たくさんの人が両方の文化を詳しく知ることができる良い機会になります。今は周りに外国料理店が見られるから、こんなことから外国の人を受け入れているので差別をしないで心から歓迎の気持ちがないといけないなと思いました。

➡ 多文化共生への「思い」で終わらず、互いの文化を組み合わせた祭りという企画を考えるなど、自分なりに社会参画まで考えることができている。また、この生徒は生まれてからずっと青島に住んでいる生徒である。青島にも外国料理店や外国人の姿を多く見られるということに気づき、そのような状況を素直に受け入れるべきという態度が生まれていると評価している。

② 授業者の振り返り

教科書に書いてある多文化共生の考え方では、理念を教えて終了となってしまうところが課題であると思っていた。最終的に生徒に書かせたい「多文化共生を実現するために必要な態度」として昇華していくためには、地域へ外国人が持つ多様性を生かしていくべきだという考え方にまで至ってほしいと考えている。この考え方に至ることによって「自分には何ができるのか」という社会参画の部分まで進んでいくのだと考えている。特にこの学級には国際結婚等の家庭の生徒が2名いるので、どのような考え方に至るのが注目していた。特に、川口市を調べた生徒については上記の資料の記述から分かるように、青島市に住む自分という当事者意識で学びをまとめることができていた。多文化共生に向けての心構え、日本人の中にある多文化共生に向けての課題、外国人の多様性を生かしていくべきという視点をもつことができたと考えている。大きな成果であると考えている。このような生徒が一人でも増えていくことが多文化共生への近道になると考えている。



多文化共生の視点からのコメント

本実践に一番関わりがあるのは「批判的思考力」の育成である。世界で評価されている日本文化、日本の中に見られる外国文化のどちらも学習することで、異文化理解の大切さに気づくとともに、文化の違いを正しく理解する必要性を生徒は感じることができた。また、中国（青島）で過ごしているからこそ気づく日本文化という視点も本校ならではの創造的なアイデアとなった。

日本社会における多文化共生が、具体的にどのような形で進められているのかを多面的・多角的に考察したことで、自分たちの課題として、多文化共生社会の実現を考えることができた。これからの多文化共生社会を実現する当事者として、文化や言葉の違いから生まれる壁をどのように乗り越えていけばよいのか、具体的に考えていくきっかけとなる学習になった。

多文化共生における課題を Society5.0 の技術で解決しよう！

国際理解

指導者 中山 一機

1 単元の目標

- ① 社会科での学習を通して得た課題の解決方法について考えることで、多文化共生社会への理解をさらに深める。 **創造力**
- ② Society5.0 や SDGs の目標「10. 人や国の不平等をなくそう」についての理解を深める。 **国際理解**
- ③ 目的や意図を意識してプレゼンテーションを行うことができる。 **ICT 活用力**

2 単元について（多文化共生の視点から）

本単元は、社会科の授業で「多文化共生 2.0」についての学習を行った際に、課題としてあがった「ダブルリミテッド」と「文化や習慣が異なることで生じるや心の壁」の解決手段について考えることで、多文化共生への理解をさらに深めることをねらいとしている。このねらいを達成するため、本単元では「Society5.0」の視点から課題を解決するための「モノ（商品）」の模擬開発を行う。青島の生徒のもつ多様性と AI や IoT といった技術を組み合わせ、多文化共生社会の実現を考えていくことは、自ら課題を設定し、自己の特性を活かして課題を解決しようとする態度を育むことにつながる。

さらに開発したモノの PR 動画の作成やプレゼンテーションなど、自己の考えを表現する学習を行う。自分の考えを「発信する」ことは多文化共生の実現に欠かせない力である。課題をどのように解決するかだけでなく、どのように伝えていくかについても意識させたい。

多文化共生における諸課題を Society5.0 の技術とその技術を正しく扱う力（情報リテラシー）、そして自らのもつ「多様性」をもって解決しようとする視点をもつことで、これからの多文化共生社会を創造していく資質や能力、態度を養うことができると考える。

3 指導計画（全9時間）

次	時	学習活動	ポイント（○多文化共生の視点、*日本語支援）
1	1	多文化共生社会における解決すべき課題について確認する。	○社会科での学習を振り返り、解決すべき課題を設定する。
	2	Society5.0について知る。	○Society5.0について調べ、課題の解決にどのように活かすことができるか考える。
2	3	モノ（商品）の模擬開発をする。	○設定した課題を解決するための「適切な」モノ（商品）とは何か考える。
	4	学習アプリを使って動画の構成を考える。	*台詞を実際に話したり、学習アプリを活用したりすることで、自分たちの意図がより正確に伝わるよう台詞や構成を工夫する。
	5 6	構成をもとに撮影する。撮影したものは適宜確認し、必要に応じて撮り直す。	○撮影した動画を見返し、開発したねらいと合っているか確認する。
3	7	学習アプリを使って資料を作成し、プレゼンテーションを行う。	○モノ（商品）の開発意図や動画のねらいを意識してプレゼンテーションを行うことで、多文化共生への理解を深める。
	8		
	9		

4 資料

① 授業の様子



動画の構成について考える



撮影の様子



多言語同時翻訳機の動画

② プレゼンテーション資料（抜粋）

<p>多文化共2.0×Society5.0</p>	<p>多文化共生2.0 外国人住民の存在を肯定的に捉え、その力を活かした取り組みのこと。 外国人を地域に活力をもたらす存在だと捉える観点。</p>	<p>「Society5.0」 様々な知識や情報が共有され、新たな価値を生み出すことで、いろいろな課題や困難を克服します。一人一人が快適で活躍できる社会になること。</p>
<p>多文化共生2.0の調べ学習を通して ・静岡県浜松市のダブルリミテッドの問題を学んだ。 ・埼玉県芝園団地での文化の壁と心の壁の問題を学んだ。 これらの問題を解決するためにSociety5.0の技術を取り入れて商品を開発しました！</p>	<p>この学習を通して世界中の人が文化の壁と心の壁を乗り越えて、みんなが共に学び、共に楽しく暮らせる社会にしていきたい!!</p>	<p>国境ない No border line 没有国境线</p>



プレゼンテーションの様子

5 考察

① 課題解決における模擬開発について

生徒は自ら設定した課題「ダブルリミテッド」「文化や習慣が異なることで生じる心の壁」解決のために「多言語同時翻訳機」を模擬開発することにした。このモノ（商品）の開発動機には、日本語や中国語、英語など複数の言語を学び、日本と異なる文化の中で生活している本校の生徒たちが「言葉が正しく伝わること」の重要性を日々の学習や生活を通して実感していることが挙げられる。

② 生徒の商品開発の趣旨より抜粋

文字や言葉が通じないことで、外国人と日本人と一緒に活動できなくて壁ができてしまうから、多言語同時翻訳機をつけることで一緒に活動できる幅を広げることができる。それによって、日本人と外国人の距離が近くなり、外国の文化も知れて、真の多文化共生になると思う。

③ 授業者の振り返り

「多言語同時翻訳機」を開発するにあたり、当初は音声翻訳するイヤホンだけの開発予定であった。しかし、聴覚障害を持つ方など、音声だけでなく「文字の翻訳」も必要であることに気づき、最終的には「イヤホンとメガネ」となった。このように「開発者」としての役割を意識し、具体的な使用場面を想定することで、生徒は課題を自分たち自身の問題として捉え、主体的に解決しようと取り組むことができた。

また、PR動画やプレゼンテーションの制作では、自分たちが開発したモノ（商品）の意図や思いが正しく伝わるかを意識して行った。自分たちが考えたモノ（商品）が、どのような場面でどのような問題を解決するか正しく伝えることは、課題を解決する手段を生み出すことと同じように大切なことである。今回は、最初に撮影した動画だと意図が伝わりにくかったため、必要に応じて撮り直すなど、試行錯誤を繰り返した。このように「商品の模擬開発→PR動画の作成→自分たちの考えをプレゼンテーションにまとめる」といった学習を通して生徒は、多文化共生についての理解を深めることができた。

多文化共生の視点からのコメント

これは「創造力」を育む授業実践である。生徒自らが、多文化共生社会における解決すべき課題を設定し、課題を解決するために自己のもつ多様性と今後の社会の在り方を結び付け、創造的なアイデアをもって解決する手段を生み出したことは、これからの多文化共生社会を実現していくために必要な資質や能力、態度となるだろう。

今後に向けて

青島日本人学校は、学校全体で「多文化共生の学校づくり」に向けての取組を通してバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のための日本語指導プログラム開発を行いました。ここでは、本校が実践研究を通して見出した「成果と課題」と今後の取り組みや方向性について伝えます。

成果と課題（○…成果 ●…課題）

- AG5 推進担当を中心に、多文化社会で生きる力として「寛容性」「批判的思考力」「創造力」という三本柱を掲げ、学校全体で「多文化共生の学校づくり」の実現に向けて実践を積み重ねることができました。教室内でも多文化共生というキーワードが児童生徒から出てくる場面が見られました。
- 「バイカルチュラル人材の育成」の視点を意識して、授業に取り組めたことは、児童生徒にも職員にとっても大きな学びがあったと感じます。授業の中において、日本の学校で出てこないであろう青島日本人学校ならではの創造的な児童生徒の意見を聞けました。
- 今年度は「多文化共生の視点を取り入れた授業実践」をそれぞれの学級を中心として行いました。そのため、バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成のための日本語指導は、さらなる改善が可能であると感じています。次年度はさらに「日本語支援」を具体化・視覚化できるようにして、児童生徒のもつ多様性を授業の中で生かすことで、これからの多文化社会の中で生きる力を育てていくことができると考えます。
- 本校の傾向として、学年が上がるにつれて無意識に日本の価値観、ルール、習慣などに合わせるような場面が見られます。「多文化共生の学校づくり」の取組は始まったばかりであるので、自分の背景を包み隠さずに出せるようになる児童生徒がたくさんいる学校になるよう、実践を積み重ねていくとともに新たな方策を考えることが必要です。

今後の取り組みについて

今後も全学年で「多文化共生の視点からの授業実践」を行うと共に、「在籍学級での日本語支援」も意識した授業実践を進めていきます。その際、中国の文化的背景を持つ児童生徒の中国文化や中国語を、どのように日本文化・日本語の指導と合わせ指導していくのかという視点も必要になると考えています。具体的には、現地校や地域社会との交流がさらに進むよう体制等を整えることで、「バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成」をするための学校とはどのような学校であるべきかを発信できればと考えています。本校の挑戦は続きます。

研究代表 佐藤 郡衛（明治大学 特任教授）
研究担当 近田 由紀子（目白大学 専任講師）
研究委員 中村 雅治（公益財団法人海外子女教育振興財団 相談役）

校 長 渡邊 浩之
前 校 長 金森 孝子
事 務 長 池田 光隆

（教諭・順不同）

岩本 梨花	尾崎 亮介	古川 貞之	黒田 由紀美
迎 香純	小谷 勇人	吉浦 梓	徳永 健治
中山 一機	吉田 明弘	岡本 直恵	長崎 知代
岡田 淳一	富川 淳	福留 さゆり	徐 暁雯
単 千子			

多文化共生の学校づくり ～青島日本人学校の実践～

2021年2月

編著者 ● 在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業
AG5 運営指導委員

発行者 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団
理事長 綿引 宏行

連絡先 ● 公益財団法人海外子女教育振興財団内
AG5事務局

〒105-0002
東京都港区愛宕一丁目3番4号
愛宕東洋ビル6階
E-MAIL：ag5@joes.or.jp
TEL：03-4330-1352
FAX：03-4330-1355

印刷所 ● 株式会社トック企画



公益財団法人 海外子女教育振興財団
Japan Overseas Educational Services